ヨハネの福音書　第１章　23 節　（荒野で叫ぶ声）

あなたは自分を何だと言われるのですか、と問われての即答が、「荒野で叫んでいる者の声です。」疑いと敵意をもって、あなたは、いったいなんだと問われる。自分の存在がなにか、なにを成す者なのか応える。荒野の声である。人も、物も、命も、水も、何も無い不毛地帯である。エデンがそこなわれた地に立つのは叫ぶ者ある。名を告げるのではない。使命を帯びた声に徹している。

誰もいないところで、誰も寄りつかない地で叫ぶ声が聞こえる。その地が、御国の王が通る道となる。ゼロからの始まりどころか、荒廃した地からの開始である。地に希望があるわけではない。地上の繁栄に希望があるわけでない。どの地も荒野である。飢饉の荒地もあれば、繁栄の都に蔓延する心の貧しさの荒廃もある。いずれの荒野にも、御国の王が通る道を用意する叫び声がある。主の眼差しで荒地を見、主のこころで荒廃した心を癒す声が荒野に響く。そこなわれたエデンが回復するように。

荒野で叫ぶ者の声は希望だ。かつてのエデンへの回帰が始まる。その地に立ち、叫ぶ者は慰められる。叫びを聞き、その道を通ってこられるお方がいるからだ。荒野に水が湧き、花が咲き、いのちが溢れ流れる日が来た。